天保十三壬寅年人日徹笑奉奥行

ことの大淡達世の什二玉よりとて
うまて申うゝ文真至出所
頑とあれいりあ人日ことしの
書きゝあを幸ま流を開くと
彼此あ人の人くる巳支を万金花
こ今をつゝ無ます

人の目を瞞て開くゝ二見砂　徹笑仙

まの不易よ固しいるあ文　可水

A5
6590
80

蓮鳥の香ゆかしき侍るくいなあるて　和光

侍るくいなあるて　定の市　龍洲

矢田苔の光の上行の五調さ　巴水

残る暑ひをしのぐ木の下　南江

己亥の雲ゆくさ月の歌　守株

声も侍るく呼く茶立虫　三代

金盛の苦をしのぶ杉　住

哥の表をし人のめくる

初とあるさ若君のまおるるて

陰子掛くゝ墨子来る

帷子の撰択も折の差蕨草

元八かるん下女ら返の張さ

移りゆく世の細工用の俳
物の昼寝ものどかなる空
咲花や雲の羽織の翻て
凡の初ゝ野仏の賜
江戸へ三角逢をしなよ見送る
寒むしろ酒の多傳ふ

家地持も積のれば持の明き
寺ゝ歳破除の咒
この寒さ詰るあ無病うらふまる
凡吾吹姿の塗らふまるとも
倉てもの付い射場ひつそりと
屋もうつゝ寒さ荒内

古方へ走ふとゝの部おくます
不愛文らゝと嘆ふる正直
有州の月に言ふ　朗さ
玉を置く赤松の系萩
遠近（こゝら）律を調ふる笛の曲
神の水隠く栄ふ神主

佐ゝ上開き佐ふる　山皇
天怪も今佐ふ君ゝ代
考ゝ白ふ花載ふ道の見
書夏夏代ゝ考ゝ日の乳

右哥仙行
名録

町中をとをり之高市　可水
七夕年々人もうるふなれば　毫内
若草野で手毎籤を提る若党　巴水
七夕年いるしまくてこそ乞ふ　南江
人見やこゝ孫々の孫の孫　和光
石笑ひ寄ひ寄々直和　三代
お宝行で元も頭巾若草橋　守株

まゝ咲ぬ枝々太行もの凡　遊耳
手附の書の白ふふ里　三岡
振ゝ神ゝ心の若やきて
酔ふ癖の書生後ゝやら
戻り轉あれば法あゝ安心
岡除禮八幡の法恵の法利生

元めかい姫ゝ[illegible]

娘ゝ[illegible]ゝ狂哥用お成

類ゝ[illegible]月の明石の浦作

雲身ちめて雁波ゝ

六十句表

○

雪解や山ゝ家ゝ近き[illegible]の春　南江

猿も木猿ゝ気安さの春　三国

延ゝ髭ゝて白も若やさて　巴水

待ゝ降ゝの[illegible]流行神

群ゝ[illegible]鳩の初春の勇ゝ

直ゝ[illegible]ゝ朝を待ゝ[illegible]

手水して化粧かゝる朝の月

そゝと吹来る風の冷やゝ

右表八幕

○

幕麦や土を敲て一二寸　和光

そゝ吹風も新たなる室　三国

右綱立て明て陸奥みちのくに行　三化

侯行る佛士の名に和る

絶るふる井戸の舟あらし

この立ゝ日和定まる

洗濯の積の翻も清もあり

うゝ若の苦しのふるあらい

うまれし所の春塚

ふる塚とやまゝ〳〵茶之虫

ゝ十月表

○

時ちらぬずゝやゝ神のうめの花　三国

あるあるしうちまもるなり

寄志〻矣文中統し

ほ立行ゝのうちし

特別
へ5
6590
80